

ここで人としての最低限の礼儀を
学び、これから社会に出る中で、
胸を張って生きていってほしい。



夢に向けてがんばる
皆さんを紹介します



私立・豊田大谷高等学校空道部

[写真:左上]

かわした よし と
川下 義人 さん(3年・藤塚)

[写真:右上]

やま もと せ な
山本 瀬奈 さん(2年・折戸町)



「夢は、向こうから来てくれるものではないと思います。かなえるには、自分でそこに向かって行かないと。日々の練習があつてこそ、大会での優勝につながるし、それが、自分が必死になって努力した『成果』だと思えます」と大会を振り返りながら、自分を冷静に見つめ直していました。

そんな二人を指導する同部の山本監督は、「彼ら二人を含め、この部員たちは、それぞれが互いを支え合い、刺激し合つて良い関係を築いていると思います。練習方法に口を出したくなくても、彼ら自身に気が付いてもらえるように、ときには言いたいことをぐつとこらえることもあります。部員たちには、ここで人としての最低限の礼儀を学び、これから社会に出る中で、胸を張って生きていってほしい。彼らのような子どもたちもつとたくさん増えるように、空道というスポーツを広めていきたいです」と静かな口調ながらも、教え子たちと空道に対する熱い思いを語ってくれました。

「エイ!」「バシッ」「エイ!」「バシッ」

力強い掛け声と共に、キレのある蹴りがミットに打ち込まれます。

「オス!」

あいさつと共に、寝技をかけ、あるいは寝技をかけられ、そこから自分のペースに持っていく練習が繰り返されます。その様子を、山本監督は厳しい表情ながらも温かいまなざしで見

「オス!」「エイ!」「エイ!」

日進市在住の二人が通う私立豊田大谷高等学校(加藤順一校長。同校の敷地内の奥まった場所にある空道部の道場から、部員たちの力強い掛け声が聞こえてきます。

5月上旬、川下さんと山本さんは、5月10日に宮城県仙台市で行われた日本代表選考のための全日本大会に向けて、練習にラストスパートをかけていました。

空道は、頭部に専用のマスクを着用し、突き技、蹴りに加えて投げ、頭突き、肘打ち、寝技、関節技、絞め技など、さまざまな攻撃が認められる総合武道です。日本国内には百力所以上、海外では約60カ国に支部道場があり、実践性と安全性を重視した武道スポーツとして、近年注目されています。

川下さんは、小学1年生のときから地元・日進市の道場に通い始め、現在は同部のキャプテンとして「一日の大半が空道」と言うほど空道尽くしの毎日を送っています。

「緊張感が高まってきていますが、それよりも、昔からあこがれていた世界大会という夢の舞台への最終通過点となる大会に出られるので、とても楽しみです」と大会への期待に目を輝かせました。

一方、山本さんは「去年の大会では、相手のペースに巻き込まれて負けてしまい、とても悔しい思いをしましたが、今度の大会は、どんな相手に対しても自分のリズムを維持できるように、メンタル面を克服できるかが勝負の鍵だと思えます」と、大会前の緊張感と興奮が感じられる真剣な表情で語ってくれました。

山本さんは、父親であり、同部監督でもある山本真司さん48歳の影響で、年長クラスの時分から空道を始めました。大会で負けが続く「もうやりたくない」と思ったときもありましたが、高校進学の際には、10年以上取り組んでいるスポーツなので、きちんと向き合いたい、と全国で唯一、同部がある同校への進学を決意。今では、部活動以外の場面でも、「オス!」と思わず返事をしてしまうほど、空道が生活の一部となっています。

全日本大会では、全国各地の成績優秀者たちによるレベルの高い試合が繰り広げられる中、川下さんが見事優勝を決めました。山本さんは、初戦敗退という悔しい結果になりましたが、「試合の中で、自分のペースで攻める時間を持てたので、良い大会になりました」とすがすがしい表情でした。

川下さんは「がんばれる秘訣は、常に成功している自分をイメージし、勝ちたいという気持ちを維持させることだと思えます。目標に向かってがんばる自分が好きなので、練習も試合中のけがも全然苦にはなりません。やっぱり気合いが大事。これからは、優勝を狙って攻めていきます」と屈託のない笑顔で答えてくれました。山本さん



5月10日の全日本大会の様子
豊田大谷高等学校提供

5月10日の全日本大会の様子
豊田大谷高等学校提供

守ります。大会後も、変わらない同部の練習風景、川下さんと山本さんは、次のステップに向かって、すでに進み始めています。